

三ノ三十九

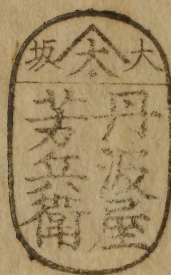
三ノ三十九

三ノ三十九

三ノ三十九

三ノ三十九

三ノ三十九



招請てうしやうして一身田いつしんでんに授あづからう干時寛正五多甲申上人卅一歳しやうしやう
親鸞しんらん由縁よしづかりよりて首親鸞上人鎌倉の所此地を入江の磯にありける聖人世のる依より
依より識識の靈蹟しんしやくをよりて永く住居とせしる寛正六多乙酉真惠まゑ二文
野州高田を舊基の靈地しんちとして掛不かふとて
後土市門院勅願所しちがんじよとして宣旨被下置如元

高田專修寺門流事

如先相續可被衆生海度有其外諸國門後可有進退之有
天氣不候也及之以此狀

文明九年 玄惠住房 右大弁判

又信長しんちやう之勢しやう足利入の始はじ由寺十二世じふにせい寛惠上人かんゑしやうにんと其睦しやうくして勢州平
均の謀はかりごとなど諍しやうせらう依より商寺へ書送る不の禁制きんせいの礼れい如元

高田專修寺門流 當寺境内不可陣取事

放火之事 右之條於令遠犯者可為嚴科者也

天正四年 信長判

此村の名氏一身田といふ三代実録元慶三年丙寅六月勅參河國播磨郡荒廢田
一百町賜子内親王為一身田これより考へて考へて一身田といふ田必掌田にて其一身
田内は娘姫梅とありあり新田一葉乃の村とありありなせり

三軒茶屋

平野村の
○中野
大乃已所村
の支御

大乃已神社

中野の森の中
式外の社なり
今も素女大明神と稱せり
神子殿一にあり

大郡田

上流下
津の町できの川の入口也
右名も小丹々又雄丹々といふ東南海流より
より一ヶ明應七年大地震の多波又流と

小丹浦

或い鳴呼見
の浦といふ
順徳院之御制表

又るりや延喜の生砂の白くは日けりたういふをせり風

勢陽内志と志の國のありて當國飯野郡安濃縣社社の条下に記せり

塩金明神

塩屋といふ所にあり
延喜式社名帳安濃郡小丹神社と云

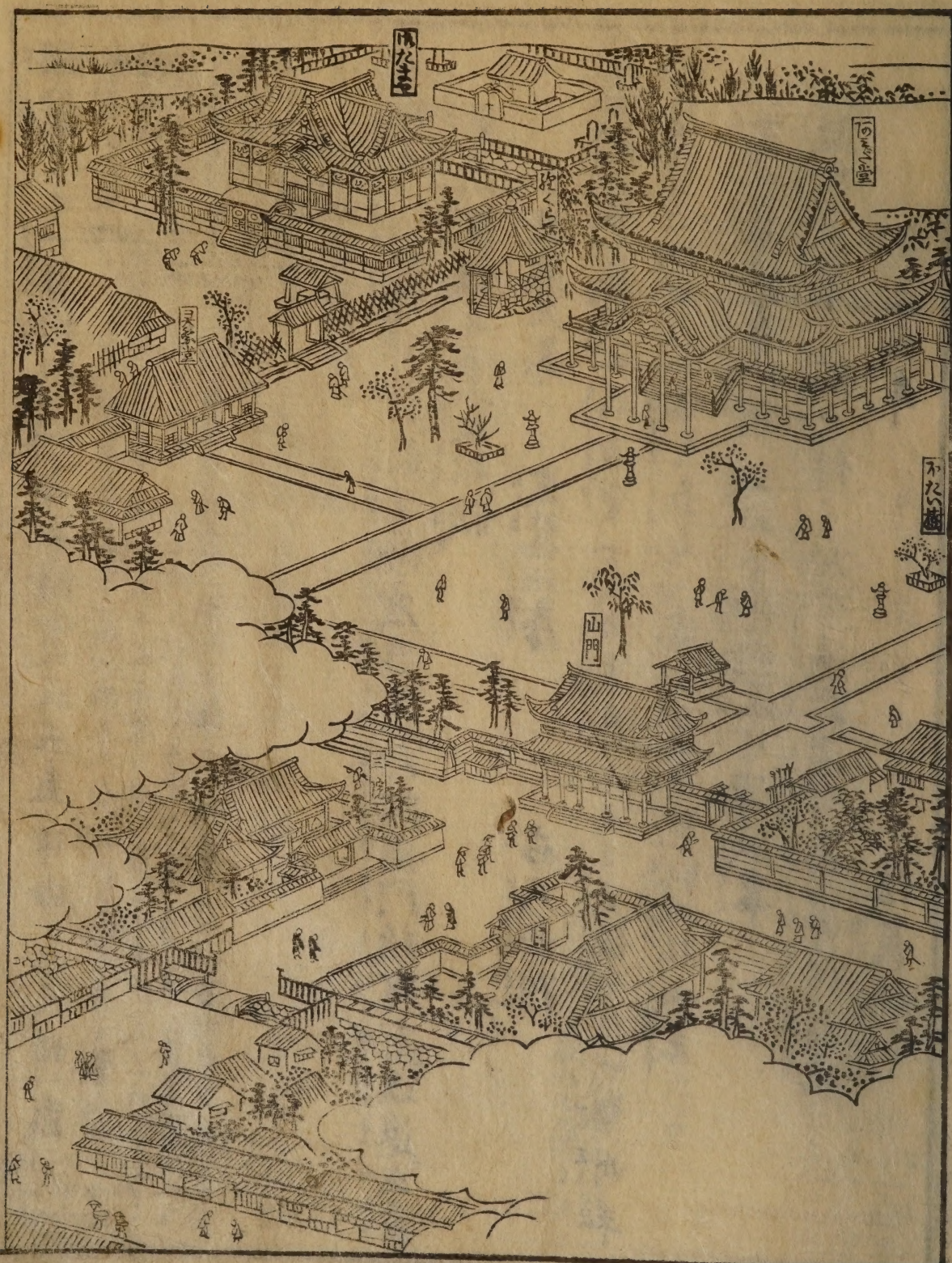
ろろと見也

舊記と景行天皇四十九年八月癸酉不祭云社記に

詳也

其二





訛あまりり 二橋ふたはしより二所ふたところいぐ一葉いつは屋村やむらの西にしへ山やまの方はうはるありて田いりの中なかつは森もりあり
其そのの額がくより春日はるひとありて後のちの
誤あやまりり之これ右みぎ杉川すぎがわ氏し事こと忌い考かうふ委あづかり

一身いつしん田高でんかう田山でんざん專修せんしゆ寺で 下野しもつけ流りゅう一向いっかう宗しゆの本山ほんざんにて本堂ほんどう廿四にん回かい四面しめん

祖師そしを安置あんちと儻たうみ十八じゅうはち回かい四面しめんの堂どうへ阿弥あみ陀た如來にょらい也なり 檀金だんぎん善光ぜんくわう

詩同しどう 高田たかたとふる下野しもつけ國くにみある名ななり 往昔むかし生なま佛ぶつ上人じやうじんとや

く下野しもつけ國くにの産うぶにて國勢こくせいをもとむ人ひと之これが深く親鸞しんらん上人じやうじんを

帰依きゐし剃髮ていふつして真佛まふつとふ唯授ゆいじゆ一人ひとりの口くち波なみを上あ人ひと又得えて一向いっかう專修せんしゆ

專念せんねんの旨あひを弘ひろめ佛ぶつ寺でと創さう立りやうし高田たかた專修せんしゆ寺でとふ生佛しやうふつ上人じやうじん

より八代はちだい下野しもつけ國くににありく第九代くじゅうだい大僧だそう都法とふはふ印いん真惠まゐ定ぢやう顯けん

上人じやうじんの美みを以もつて中國ちゆうごく佛法ぶつぽふの大願だいがんを起おこし加賀かが越え前まへ近江おみ等らと

經歷けいれきして修勢しゆせい國くにより先まづ暫しばらくく心を化け度どし妙みやく朝明あさけ郡のさけ大矢おほや

智村ちむら光明くわうめい寺でに居こし其後そのち三重みへ郡のさけ小松こまつ村むら中山なかつやまとふ石いしに寺で院いんを

建けん立りやうして移うつ將しやうせらるる犹なほみ奄藝あまぎ郡のさけ黒田くろた村むら誓祐せいうとふ者もの急いそる

一身田ろまゑ
 高田山たろど
 専修寺せんしゆ



豊久野の
銭掛松

銭^{かね}け松といふ
まづちといく
らもかけた
うなをそ

まうん
けう
あーれ
かた
ち
そ



のこ

う

びを

かけて

たき

おうは

自然軒

鈍全



いふ左神宮の所臨をうしゐるなりてあるれ松とう人

て小祠ありありなる小祠をて松のてありたといふ人々安に來りて

左神宮と遙拜し御供料として松の枝み錢をうけて米穀乃

さうと祈りしなり錢掛松といひり。又伊勢國臣部省國帳錢

篇曰豐國野ひる神靈者豐斟淳尊とよくねのみこと之食。星をみて按むるみ

昔此野は豐斟淳尊の社ありしが後此社のうせなり其の松を

極て錢掛松といひり。面説の内國帳の方を味あり錢り今の役束のり

羽鶴老人錢掛松の一説ありて其を御優の文り。儼り龍節調ふるも其友人

野崎 この村舊い山田井也和名松に山田井とあり又延喜式社名帳より多ふ

此里今標射擲錢の店なり。社とある即山田井東山の御願八王と云い是之

土岐の百塚むさづかまが兵と修勢國を合戦して出た兵軍せるといふ此府のりあり

田村西の入口西の畠の中継束の大落のりあり。塚ありむさづか又云はたの塚とも云

楠とたむの本と云ふなり。いふなり。○はた大膳をま唐政を窪田とて右馬政より大膳をま

窪田くぼた此村の内馬場とある町の南の田地のり。政不ありいふは内なるあり。東鑑文治

ありし文治より花のうす此南の山際、昔光光山祥若寺と云、伽藍の焼あり

光明山安養寺 本尊阿弥陀佛 其基他 十王堂あり 基言菩薩の用基也

東通寺佛通禪師再興して其後其言の光賢阿闍利本此寺を修つ文録の記破壊し

て今此地を道とも其路のうりて其言僧徒せり。一説佛通禪師を光賢とゆぐりて海會

郡明野あり 住より安中又神明の郷とよりを神宮寺宿の聖域と葉湯を吾と

汚穢を濯む其因縁は寺ありと云尚明星の幸み候と

六大院 六大院村あり 後柏原天皇勅額六院を至て寺於百石と附せらばつが慶長

年中安徳津 惠日山親寺人六院ともは後今の大室院の遺基なり

空也堂 冷井と西念寺 此村の 此を守る家三又あり 冬に氷れが誤

語を唱へて狛の修飾と出るる系空也寺に曰く上人自他の像

甚古物に 鏝にいたれを弧と云又ハツ股の廉の角と付也とせ

毎年十二月十二日法を修ふ 縁起あり 系都空也寺と遠よりあり

坂部村 窪田村あり 一身田の標石あり 系空盛の故あり 但お門を封へんと別あり

例 襖洲齋塚一宮 是を例 襖洲村あり 礼儀手標とも云 首級宮なりと

附例として此川の洲にて水襖一 殿殿へ入らせ給ふと云今い畠と

ありて 殿殿の路とこの橋より一町計 東田の中又塚ありと云

の板あり 里人より塚とよびて俗談ともあり 此を 殿殿ありと云

三ノ宮

三ノ宮川

いせの宮



関の退分
東海道
参宮道



豊屋和尚之院麻郡城又瑞光禪寺向國弘の會下村方松山永明寺の別院なりとて境内に
 國長門守源居國万徒の居邊永明寺燒之の後此地所寄附せらる會下村七十石余のま今
 又此寺の支配方より永徳寺中三條の古鬼傳あり又天正十一年國宗國宗一盛徳寺是に孫三湯の湯男
 盛儀の古案あり又天正二十一年の古徳あり○勢陽府志に瑞光寺は川上村より國の中町より
 二町小なり今に後寺地計あり
 ○按るより川上村よりありト湯津盤村なるべし
 湯津盤村 新案に足合とゞー今人あるー

危く川をわけてとむ月のゆらめくけとさやけと

法眼新濟

湯津盤の本林 國弘の東三町小なり今又路ありて小町の表と
 稱として小町村ともいふありなるべし

清岸山福藏寺 龜山畧記に坂本西教寺流鐵田三七信老の
 香苑にありて近江大塚長政がこんまうあり

追分 東海ととま宮ろ 大井常彦燈を建てる方集宮道なり

関川 倭橋九十九間なり此橋九月より翌年正月まで關本傍村が架る
 貞享二年乙丑十二月の定めありてなり畧を

古驛 村あり 珍麻郡賦に古厩と云 神宮幣馬のやどり不也 倭と包井とと
 名あり

今を安を建て宮造りのおとわりのわい即神宮の家なる印とて
 神といふよりいふに當村と楠原村との間珍麻奄本郡の境なり ○楠原村 此村の表
 水上の門郡福徳村の

山奥よりうらぐと出れ ○天神社 村あり 延喜式珍麻郡十九座の中志

波加支神社とてる是なり

林口 古名松葉 明應中林號中守祐紗の城趾あり

觀音堂 大同元年の草創と云ふも天正二年泷川一益兵火に焼けて今は

中縄 津久之慶長己未の右記云元和二年丙辰城主此村を置多貢教

免の地 この村より西南の方より岩嶺あり

掠奪 中縄の南の方より往來の大路へ安濃郡と云ふ所は標本を安濃郡あり

村中凡江寺と云ふ寺の庭に大なる標の本あり 里の松と云ふ所

片瀾城趾 標本東西の市中に片瀾とて首級郭園所あり 標本標本詳

高野尾 舊高野尾と云ふ其所の村に天王の鑑あり

豊久野 惠日堂記云雄略帝の御時丹波國より豊受大明

神を勢州へ遷し奉る時鈴麻の神戸よりして此野より宮を焼く

体よりせ給ふ所路をれば等由氣神と云ふ所の樹石の二所あり

銭掛松 高野尾の東の曠野に多き一株の松あり是即松

其右なるあり程なる一里半づりの

同異中閑眼の話

一休の閑中下向をえうけて彼閑眼の
 尊像の二條其まのやうて佛

のかしら人あさうふ小使とこそ

閑眼のともなれとて後成も

見どくそつたう消し人い

そとらぎもぞりて水と

そぎはめなれはたうさう

其人のい拙怪つて然う

てがきつれうし心かん

つひたの天下の老法師の

我目をひくせうびたる地

と何とそりぞれろぞと

ふけくいさるふあて

さう人いふき又ぞり

あへだく船和尚の
 妙はと人



りとてあつくのめ
 をついで歎と多岐ふを
 和尙とのこひハ續鼻
 を解とそと地蔵の
 着又纏いあうて
 けふらる是も如
 神はしとは思ふも
 といのち持よ
 物ぶして散への
 おくハ纏ひ
 うハ物怪ハあふぬ
 かくて後和尙帰洛
 の時其まといふ瓜
 解とそとふこの
 をふとけ墨と
 かつとぞ



所名

此橋の地勢半より半町づり西南側小橋屋敷を流るるのりのを其古樹なりと云
エゾと云い初文文のそよりそぬの言をとりてつひつゝ人々をたすべし
と云い一うがすいぬと云いとも又西の村は切さる路の橋本より芽を出し
ふと勢陽府志の説を信じぬ

久織村白石明神

此神は小松内大臣重盛公の神と云い
久織村は其末孫の神と云い其末孫は
久織村の神と云い其末孫は久織村の神と云い

久織村の神と云い其末孫の神と云い
久織村の神と云い其末孫の神と云い

城山

城山はちうつへるおとく今右井の地なりと云い

御新嫂塚

國長門守妻の塚なり國氏の家老
御新嫂塚は國長門守妻の塚なり國氏の家老

三日城

信長の家老三川監物
三日城は信長の家老三川監物

和琴の橋

上右より天子の宝物は玄上又鈴鹿と云い
和琴の橋は上右より天子の宝物は玄上又鈴鹿と云い

此鈴鹿の橋板にて制しう有ふ今に其路を琴の橋と号し
此鈴鹿の橋板にて制しう有ふ今に其路を琴の橋と号し

抄云累代の宝物なり但毎年新神樂は万人用之
抄云累代の宝物なり但毎年新神樂は万人用之

藤原代帝王の渡物と云い平家物語にも云ふ
藤原代帝王の渡物と云い平家物語にも云ふ

の川は架つ橋をことのぞと云い又相の本島と云い
の川は架つ橋をことのぞと云い又相の本島と云い

其る所の川の橋と云い又須田の記に
其る所の川の橋と云い又須田の記に

鈴鹿川相の古木の丸を橋と云い

俊成

川上山瑞光禪寺

寺内は権現様と云いあり
川上山瑞光禪寺は寺内は権現様と云いあり

関地藏堂

勢陽雜記云

文明年中尊像再興
の時往來の僧一休

和尚を招いて

開眼の導師と

す其偈又曰

釋迦の適ぎ彌勤の
未と出ぬ間の浩き
浮世又開眼地藏





筆捨山 本名 山名 山

筆捨山

筆捨山

筆捨山



鈴鹿園趾拾茲抄云迄坂不破鈴鹿。日本之三園之。續日本後記曰

桓武天皇の時始て建後醍醐天皇の御宇に園所停止建後通へ能撫使等

帝の朝崇峻帝聖武帝天武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝又武帝の朝

えづ 操

地藏堂

九國山地志院室奈寺と云ふ。龜山畧記云真言宗開山應宣僧都也若按白

比丘尼八百監自第又室奈寺と記云顯あり又宗長編巴の記又も地蔵のる像

多の建立なり勢陽府志又も地蔵菩薩垂像傳教大師の園基其後文應年中中堂焼

此附尊像火滅せり文明年中中堂像本堂とも再立あり此附一休閑眼の導師

と云ふ後又圓縁ありて元禄九年建立なり勢陽府志

えづるぬれやと云れ園るらんや拾ふた花のうける

新後撰集

いせの勅使よもろひて鈴鹿の園を誠とて

定家

朝日辨天

弁天橋

一の瀬川

一里山にありを多

公々深茅の家を

うく

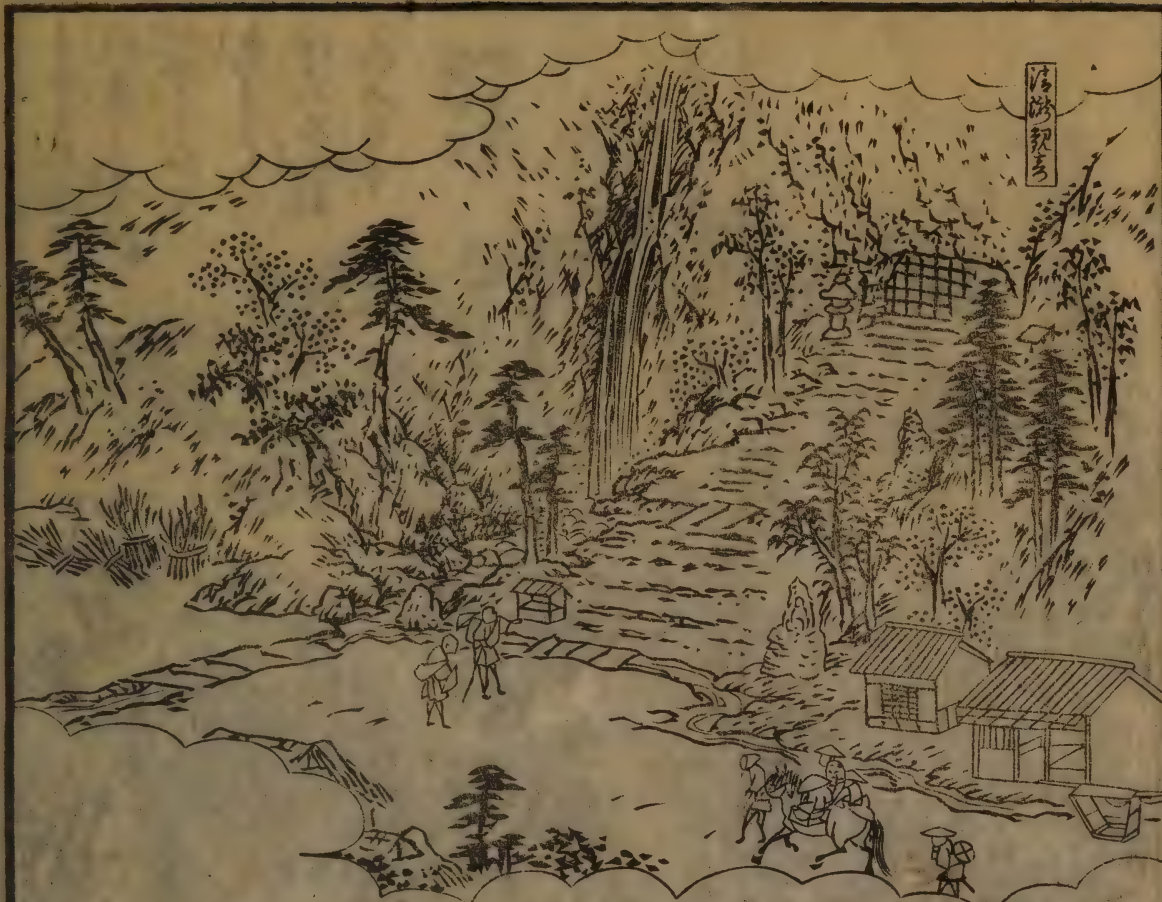
此宮等捨山の

遠き九軒計

の氏神



清浄觀音



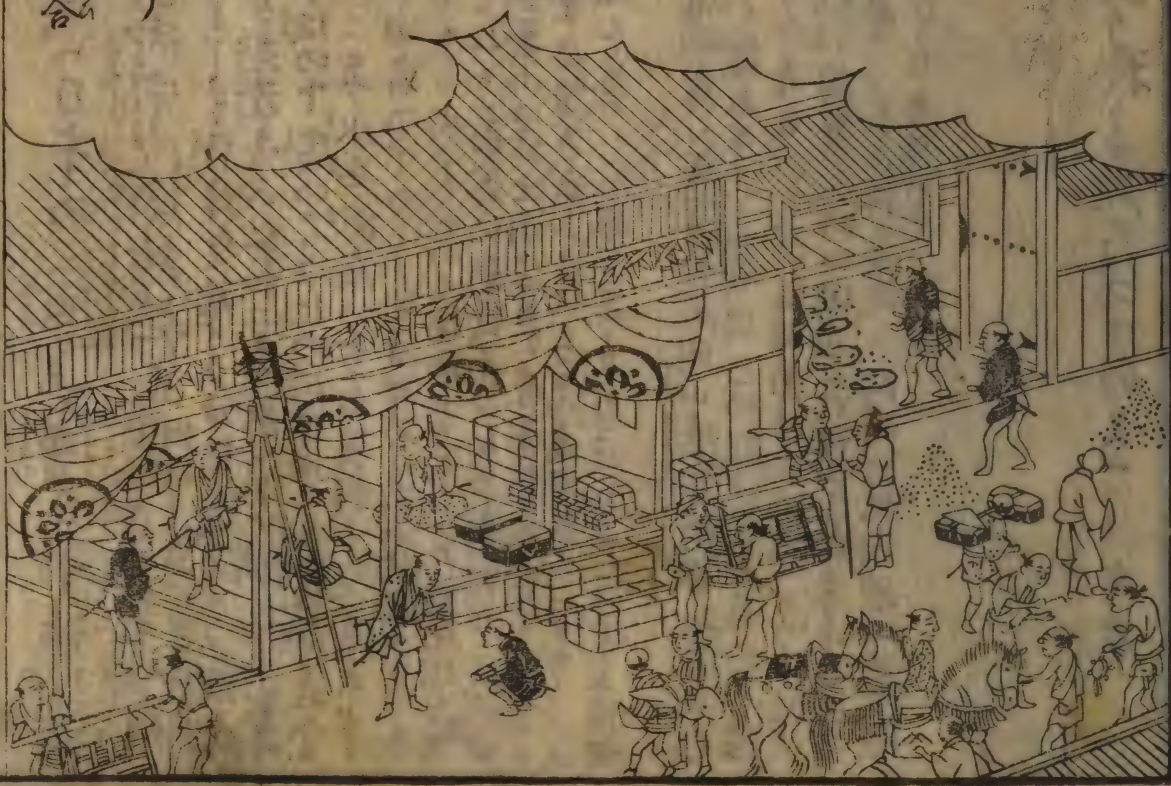
坂の下

古名能康歌





此郷の産物
 又板の木櫛
 坂の弓弦と
 て北畠教具
 今の記をえ
 くり
 又可輒敷
 至て漢音之
 こ移く
 流石と小石
 なるなるあ
 の落合



清見原天皇

鈴麻川と渡

王孫の圖

天武天皇大友皇子より
龍谷吉野より麻原
を経て此所にあり

孫麻伏兔と云い
是の時山中に燈

の火をたぐ忽一人の翁

あつたれて天皇は謂て

我々此山の神大山祇とて

案内は添き給ふ水増す

つらうの孫の母のづつ

麻原りて天皇と厚い

なりて跋路の鈴と付て



多うぬ因て
 経麻と号云
 此抄さなと
 勢うく
 油火土の神
 とふあう
 江州甲賀
 郡あり



鈴麻峠

田村明神

鈴麻山

鈴麻権現社





山中

雅康卿閑

東街道記

山中とや不

にてわきぎ

とみまき

うふこゑ

それうと

まけが

ふやふ

まきまき

あゝ

うん

道の傍の松は横

のやうなありを

喬木に

とよみ



筆捨山 岩嶺のふもとに越前守石法眼將野元信の墓あり

羽黒山 園の中より北町斗小、岩あり、但し斧拾ふと連珠山なり

あみ出を一人あもいゝぬ大石層疊、一々鑄窟、嶮石其敷を不

知て虎豹熊羆の栖ともいふべし 巖中に小祠と菴あり 則ち羽黒山を

去信のいふ権祝の執法、昔次信忠信兄才不周ありて上洛せし時此石にてあやめりたりありて

龜石 ○天守石 ○布袋石 ○花瓶岩 ○よきぬけが淵

茶鍋の淵 この深潭あり其外壽石かどある

瀨村 平の盛信の古案にその淵とづりもあり

川名あり 皆三神とより流し出て八十瀬ともあり 大黒石 ○惠美須石

長持石 ○ころび石 姿の如くころびたり

関 今驛宿の名ともあり 園屋の、園の驛西の入口より二三町東と

中本戸町とふ此石人の間に細き小路を重通る不背の園屋の路なり

うし伝ふ ○御新嫂塚 縁奥 ○火縄 名産なり

橋の希天二里塚の東の橋を以てあり
尚屋の傍の
石をくましく記す

不_レ久_レ王_レ久_レ記_ス

○山石窟いんや
坂の下驛さかしたちやう

老母の方より大ききなるは瓜切ぬき（自注）の石堂にあつゝい内は阿弥陀親音地を
 を要ふ一其ゆくゆくは法泉刹より文をよめる所は法勝の親孝と稱を

坂の下驛

九月二日

金藏院

仁壽年中慈覺大師の

維古於蘇

小女溪

燒地藏

番うけ村

寛文の比挑を年此地にて
加着盤母の款もあり

橘なつの本

一里山
朝日弁天祠

權現山

子にありて名付くより 經麻郡賦あり

四軒茶屋

解まが板

世傳云昔此谷に
 大なる解まが妖あり
 とて人を挽む
 旅僧見よ會て
 佛經を説き偽
 て是と告叙し
 其塚を築く云

或云昔此谷の山賊埋
 伏して鬼魅妖怪を
 企てんと威を
 物を棄て賊と名
 て解まがのひかり世
 横約する者あり
 かり
 日本記云露跡と云
 八則賦の云く是三同



田村川

秋葉
大井宮
迎拜

本社



田村大明神社



田村丸

誅仲成

加茂自太律
宮祭記云

暖微天皇

弘仁元年

上平城

天皇藥叉

の影はまよひ

兄仲成が力

久しうと御後

復らんが都

を遷んとは是

よんで勅めて諸國と

ひら田村丸を大納言

として禁中をゆるしむ



上皇大ニ怒リて畿内
紀伊の兵を召し

兼子と日興と國東

に赴き孫八を又

田村九と大和と

一々を綿丸を

副將として尚幸と

り田村九身のおろそ

に梅久ねと源く加茂

邦と新里郡経麻の國

これを遮る此は抑いて

陣戦いさふ被邦力の加

りりさるや秋多の軍兵

ふも執りて現れて逐

仲成を討殺し上皇と

宮に還り奉ると云

後田村の諡は清水の親青佛力を

著信せしはこれのふれより云



八百と云ふ鈴麻官道の間凡廿六町往古と山城宇治より伊賀名張
を経て伊勢に入る其の此との内長岑といふを就えり今の社
より二町程林麓へ少細道也是古よりあるの中なる

女宮家集

と云ふ山ありの中なる君よりいささるるをふとてこれと云ふ

○平城天皇大同二年遂賊鈴麻且龍と旅人を悩とて禁廷に訴ふ

勅み因て田村丸とれを係又弘に年中又上皇と此より遮る其後延喜七

年九月捕鈴麻山群盗其張率十六人係之云昔の樹木をたれが山魁

るをとりといふる空をくわかれど今昇平の化あるぬ隈もなくくた地も終後の憂るこ

後撰集

と云う山いせの何それ捨衣捨かれうと人やうと云

これす

三神山 鈴麻と云ふ是を古名片とて三神番路の地云伊賀の船人けふの雲のさど

坂本村 此はとりに鈴麻川橋あり洪水已後との根を古町といふ

田村社 鈴麻の田村お軍の雲垂をある

かど石 是も鈴麻の山神にあり毎年二月八日磐石繩を張て人を不考愛宕山現乃

所著

○たつ^{長尾}うと坂 とうふの坂の名えのぢやうの八丁

秋の野の草の露と雲と花の山

所名

○鈴鹿神社 本殿 天照大神 荒魂 瀬織津姫 尊氣 吹戸王 尊速

佐須良姫尊相殿に座と後丹倭姫命と合祭して別号とし山神

社々縣主の神社々々
を社宮又故宮三條ふ所の此不又於宮身曾貴殿
と國司より造之ありて故宮群所の所にも

の系宮にも此頭宮身曾貴殿又抱ひて伊勢濱の姫をいづりて赤橋へ移すといふ一へに、
 蒲川の陸奥より八丁を越ゆるの方より伏見院永仁二年春二月火災ありて今の社地より
 といふといふなり。此社主の系より櫻(初太石の南)細石あり是古より今の坂の下の後
 はあがりて幸陣といふ地名なり。

頓宮
秘宮群芳の玲廉の玖宮に
族のあふまけり

新勅撰集

いさくともふいさくせん 寝るころ夢のかり 穂のお葉より々々

通俊

所名

記花集

○とく川 冬魚の目をうつやうにとく川八十瀬の波うつやうにとく

皇太后院

活部

橘の糸天糸の作勢の海の視のう
多氣窓堂曰昔南園終廬の檣板にてつう々々
やまゝ寝うつゝでうたりのふて代々帝の堂物と

ともわたり共橋板のうきぎに
 新藤のうきまきもあはれとて
 橋板のうきまきもあはれとて
 新藤のうきまきもあはれとて

のむすぢとて麻の社のつらみくちまはやくとくとつ色あけぬそふけなき
いよくかうをちやとちひ木造の具丸まきち合せ麻袴のおまめつけに麻のやとろ
於宮守まきちぬぐりやせどそこよりちかふ板のやといふ不み橋板の希弋王と

土山

さういふく

泥濘の曇る間の

おと あめがふつ

此洞解いびく板とつへ

やぶ坂のやれやうに押し

見ても其前後を考ふる

泥濘坂の下の間よふ

ふーそれが

百年の

早霜

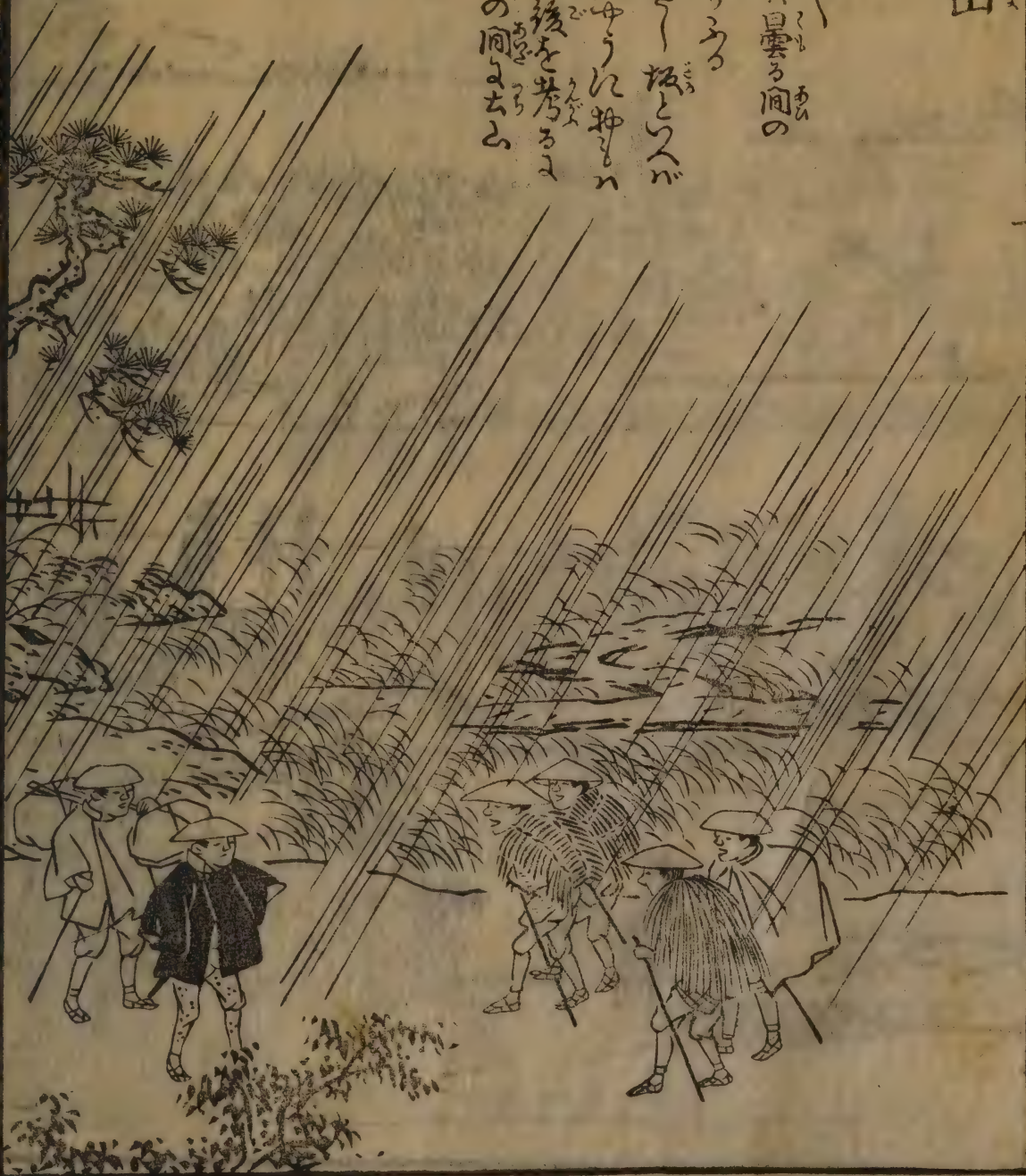
と経

が其ふ

野の横

を改む

るゐを



あはれ
今接ふ

むろの

街石

へいふ

遠い

て名あふど

も異るふ

あう今若衆

と松尾どの

わの方光宮

村の元いふあ

つて毎宮の

旗定け五經

光宮の山とあふ

坂の元と坂と云

くをて

考合とる



いさみ川

このいさみ川は、
 此川上を松尾
 門と云ふ一里外
 例幣殿此う
 換して金庫
 の取寄にあり
 と云次尊と
 見へり

三六五



水口境

いさみ川



稻川いさづ○山口志兵衛重成清泉碑山口志兵衛重成清泉碑
稲川の古橋を破てたの方より三尺斗の石の

山口志兵衛重成者勢州之人也本性住山氏初名盛治號三左衛門其父甚左衛門吉久仕飛彈守蒲生氏鄉領鈴鹿郡住山村娶小川九京女生一女三男長曰内記也盛治者其弟也氏鄉移封奥州吉久亦從之盛治及十八歲來江府事修理亮山口重政慶長十八年重政及嫡子伊豆守重信有故忤旨竄于武州入間郡生越龍穩寺重治辛勤竭乃奉之元和元年攝州難波戰重政重信屬掃部頭井伊直孝正攻之河州若江重信一番合鎗先獲首級其身亦被瘡寇兵進至盛治從其役與同僚兩三人擊退來負重信掃陣重信得免既而沒重政嘆盛治戰功跋群示感書界山口氏及其諱字且授家紋於是盛治改稱山口志兵衛重成乱平之後重政赴高野山欲至南海使盛治事雅樂頭酒井忠世寬永五年遇赦歸江府仕幕下采邑依舊同七年重成婦仕重政同十二年重政易簀次男修理亮弘隆嗣其家重成勤仕如故正保四年弘隆奉台命守江州水口城重成從行水口土山之間水乏行人苦渴重成聞山麓清泉湧出盛夏不涸掘井于稻川疊石為甃大為行旅之便兼應三年五月十六日重成病死年六十九號即翁了心其後經年土崩石傾其子志兵衛重主頃間追其志畢修覆之功依价者請記父之履歷固辞弗措乃述其大槩作一絶示之

從役難波揚勇名

清泉日夜流無盡

稻川療渴本源泉
洗出忠心一寸誠

延宝已未冬

整宇主人春常法眼林重民識
孝子山口志兵衛尉重主建之

金毛院金毛院
孝子内親王

瀧樹大明神瀧樹大明神
御祭の類あり

依佐野依佐野○今宿今宿○大野大野○德原德原○市場市場○前野前野
依居あり

土山驛とやま 一里山いちりさん 〇 幾里野いくりの とやまのふちをさへ く明神の墓を 往來

田村大明神の社
村の北にあり、銅の鳥居
正徳四年丙申に建立
及上田村九の霊を祀り
別当あり、非常

右を以て後二條田村丸を討つに密計ありと云ふ
奥城を殊に試みんとす 救回逆臣仲成を討ちて終無心の諺を棄てて
其名聞安んずの啼を擧るのみ果す

夏を^{あつ}く^はみ^は其^{その}霊^{たま}と^まふ^ふみ^みう^うい^いく^く勇^{ゆう}名^なと^とて^て雷^{らい}門^{もん}で^でう^うん^んう^うな^なら^らる^るべ^べし^し

今も 於 越 名 の 中 山 嶺 と 山 口 二 ヶ 不 交 其 後 又 村 丸 栗 田 の
 山 城 栗 栖 山 今 其 家 あり 多 又 十 二

田村川 橋乃 明神の傍に
一名白川

田尻野の 柳をたのむ 右に靉靄堂あり其山上に一木松あり。猪嶋かしま明あきら神かみ 解あか後ご

地名中より細
圖上より記せり
解屋ヶ坂
右の谷に蟹の横あり
○猪鼻
○山中
取次樂寺

孝右佛のくごふつ
 縁ありえんあり 愚願和尚ぐがんしやう 基祐天きゆうてん の名号ありなごうあり
 〇 撰えん
 〇 澤さく

江州勢州國界標本

鈴^{とよ}廉^{りやま}山 奥言の事本より今のところと鈴廉郡^{とよりやま}賊^{とよ}又^{りやま}今より

とて鈴廉の山も今の郷道^{とよりやま}を挟んで南北は聳^{とよ}而^{りやま}去^{とよ}俗^{りやま}八百

所名

山夏身 此不横川の石酒又田安ともいふを傳る茶屋多し其家毎ふといし里水

吉永。三雲村 江南六角旗三雲王馬之助。田川 小川あり横田川

横田川 土橋あり。西の方より山あり。林元字山石。烏帽子山石 西の岸あり

泉村

光廣御道の記は泉といふ所

夏の日れゆくてぬるき風より泉といふところ

北賜 貴の内は八幡。林口。馬場先 南の方より金勝山飯道寺あり岩津院といふ

正八幡宮社 水口本戸の外を林といふ。其社あり。水口を祀て後を伝ふといふ

水口驛 御を筋九丁余

大宮社 坂下の南。大德寺 漆玉宗子細

城山 大徳寺といふ。正源院 秋葉權現の社あり

布引山 水は北口をたふさる。三雲が岡に低く。布と曳くといふ

各寄

嵐ふく雲のそそれぬとてうきとていふ。長明

栗林。新城。小里。外形岩。岩井。今在家

岩神

初はつめて岩いわと
 おろしを村むらの
 人ひと生なれ一ひと人
 此この岩いわのまま
 抱かかきおく族むら
 人ひとはたゞ其その
 るるのなみみ宣のたまむ
 をを信しんぜり
 いいわわ大おほ石いし奇き石いし

里人さと人ひと同どうじ

石いしの方あたに川がはあり
 あ上うへに云いふの奥おくより
 出でて横よこ河がはへ流ながれ入いる



水口

大園古甲
古平
甲長明

紀多志

紀多志

龍王

山

大園

寺

大徳

寺



大とくち

甲斐三郎
のり上々
郡名の
記

長明後心
のり新古
今集の
あつひ十訓
抄よつろあ
大原ふんて
僧とめり
蓮瀧と改む



横田川

一名石部川原

まよ

横田川石部

川原の蓬生

秋風さむ

とやこ

急しも

長明

源ハ甲斐郡

大河原のふち

より出てふちの

東北へ出松尾川

とぬる西南へま

がれて酒人村の

南西にて横田川

と合へ横田川

とぬる南より

又西へ出く

初雪
ふりし



石都の山へ
 金山の近き
 小川に野洲川
 とふ川あり
 これより西へ
 流るる村の
 ままより
 へる



夏見の里

方丈記ニ冷水の
 流るる元のあり
 又あつてとて
 け本偶の糸糸
 り元の水にいて
 ちうも最候をとして
 すききまよとぐる相
 と枕草紙より
 たるい
 とるいん



二本松



石部驛 いしへのき

宿のひがし
平松村の後の
押さへ
松とあり





英一松

平九村

吉八と明神

梅の木 うめ

冬 ふゆ 苦 く 菜 さい 根 こん

姜 しょう 玉 ぎよ

あふみの

湯 ゆ 番 ばん を

あふみの

ひめのふれ

菜 さい うり

信海



夏衣ゆくても涼し 梓弓いそ人のふら松のしと風

家隆

石部社 石部の町の 延喜式麻垣上神社 甲賀郡上の社 吉姫大明神下社の

吉姫大明神を祭る世記曰倭姫命阿佐加瀉又瀝又あきまことと

多喜連末が祖宇賀まてなる吉比女吉姫二人ありあき其時吉姫地

の御田希に麻園を献じると云ふ因て系宮に由縁ある社なり啓蒙

落合川 白雉川ともいふ。本村西の村の

阿星山東寺 長壽寺と云ふ。宗山門の事。石部街より十八町東南にあつた。地蔵菩薩の像。聖武天皇建武元年天竺再建此寺。開基よりこの寺の宝軸あり。

阿星山西寺 常樂寺といふ。宗山門の事。西の邊あり。なるより八町後なる。天竺山門の事。寺のいふところにて阿星山といふ。西寺ともいふ。鬼籠の法會あり。其名を執持令と云ふ。

其教多し。崇徳より其地なり。

柑子袋。平松村 村の右の方のふら。松といふ。一山に二町余の回。石部松といふ。其生ふる形一樹にして根より十軒を出て其寺に繋がり。

針村 入江の小川針川といふ。名不かり。松葉集は修勢國の名不とを執持と云ふ。修勢國

家集

か衣ぬ針川のま柳の糸よりうねるまも来ふなり 躬恒

里夏身 近江の浦といふ。名不あり。但し此ところの名後と

主詳

所名

六ヶ所村之昔^{むかし}大なる梅の本のあり葉屋あり
 之梅の本葉屋といふより^{いふより}なりは地名より^よいふべ

和ま中ちゆう教かう
元祖津田宗方の後原はら是これ被か之の今いま代だい獄ごく田でん彦ひこ十じゅう希き先さきて稱を某の實永えい
の比ひより賣始はじめたとぞ國くに書しよとわ中ちゆう教かうの名の後よりと某の方かたの悉く興之の

此藥ハ和方にて医書よりあるなり。此藥は毛利家長春の類とあり。あり。松永貞徳
和歌本房の侍などあるなり。○月村は定歳と名乗て製造する捨別と云ふなり。此名

上野 ○ 林 ○ 佐勢落 ○ 金山

 の郷より六十年来の事

養子甲賀三郎の。○倭地志甲賀傳引て曰醜珣天皇御宇信濃國屋内明府の佐人磐
佐左馬源朝延又佐々勇名あり男三三人あり嫡を皇月去帝系

義経男佐三郎貞光三男至月三郎兼家とありあつた。義経國を其子の興進に傳へしをうけむ
 兄佐三郎兼家とあり又中義家武勇とられて城後のとくは継代を兄の三人其武功を傳へてふりき
 谷実家一二人のふりきとあり兼家ふりきふ命を冷めて月を経てまゐる二人の兄はとて
 義経の討軍功多しとありて近江國甲賀郡を賜ふ甲賀近江守と改む後佐賀守國を賜ふとあり
 佐那具とあり其墓は國阿拜郡一宮の奥音谷とあり

後のふ成へそのふとふ

萬葉
白檀石邊山常石有命哉戀々居

○代匠記曰古吟集は梓弓いそぐの松とつけたるゆへに人麿と往せり又佐々木兼光は後い
しうり破邊某と云ゆりありかの兼光空代々への佐人かれ破邊も亦の名派氏とせり
ゆへふやと云○志うも人麿へ近はるの風宮まで下らむしう彼集は又よきまばらとく
類いふと名をかたりし

目川

田くも田樂
 法師捧のる
 んふ付てとび
 くる其形ふぬ
 ころふよりて号
 ーちるズー



三上山

一名蝦蟇山ともいふ
連山、山中より水が湧き出る

益須那たりつゝこの山の
石は見えゆからん蓋はけり
ふとのふみふみさびへく絶景
いんのかさなり但し三とこの
頂上三ツ岩ありてふとよ

似たり

附言 いで 伊勢物語七ヶの天と

つ書より一尾尻といこの
三上ふの美名之其うさ

ふに似さればなり

赤人

浪の三とのふ

月よ 海うれや

塩尻のやま

今按いふをりて其地

とさつといよく

な一とふは此ふを

美濃川



春あけふとくふるふり
 てふれふふのぬるふ
 後人の性ふれふ
 よふふふふふふふ
 赤人ふふふふふふ
 七ヶの大ふふふふふ

富士御鏡の記

母のふ

富士のね

遠き

傍を

をく

三上の

三上山

ふのたれ雲 兼孝法印

三上社 村より

祭邪王御影命 南宮の

瓦釜にて炊と陶器を食ふ



草津くさつ

立木大明神たつきだいめいじん



左木大明神

左木大明神

末社

本社



て鞆むらたにと云

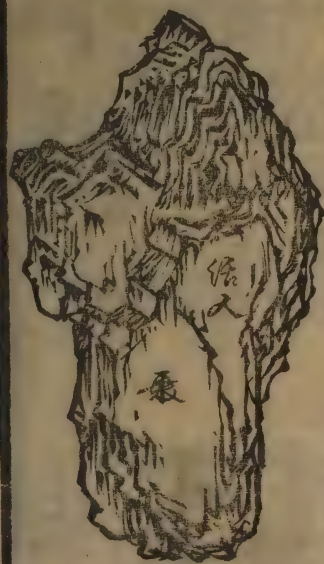
てこひ合とれば昔此地はあつる若樹ありて終は非木ともせしうンデブチに訓みて極にフチお
のまかり芝^{くさ}池^{いけ}産^うひ竹^{たけ}の根^ねをれとも昔^{むかし}は^ちて造^{つく}うさるゆもみづい今^{いま}そり^うの^う軟^{やわ}い^うを^うかり

を^まあつともつて^{おん}神る

馬九光廣の海路記云やそより、
 芝津と通ふ所の遠くは、
 東に向ひたる多き處にて、
 本所と森あり
さと
くまもと
くまもと

非もまづつくとしてまづあらん
 是もまづ日け衆とことまけ

○私よ白^{しら}此地の^{ここの}沢舎は^{さわや}名^なを某^{ある}とつるあり其家今^{いま}既^{すで}に十三世にて^{しんじゅうさんせい}お号^{ごう}を^を後屋と^{ごふ}稱^{いふ}するも又
地蔵の縁あり^{ぢざうのゑんあり}似^にたり^{なり}
^{あかへ}松翁^{しょうおう}と^とり化石あり^{けしきあり}その粟^{あわ}を^を郡の粟の大木のかうく宛とてこれより^{あまがほ}亞相中山君の記^{あさむねやまのくにのみづから}



化石之譜見鴻邪代碑編湖東石亭所録之雲根志品類有數属者近江國栗太郡
草津驛舍長駒井某者持栗樹化石來而乞其名且記之方今獲審親之其高二尺
餘斧削痕存而不煩瑣琢自然成置崖層巒之形峭壁攢峰之勢充足愛詔焉淵明栗
里碑石之名何答栗本栗石之奇不啻驚目而適心而已不寧不崩永世室傳應為
一郡之靈鎮矣今名之以活人之享盖栗子其功是以活人石丈宜襲其德捨無
窮因書以還之云

寛政甲寅晚秋

前権大納言藤原愛親

○近江國栗太郡うの化石を

そめいはいふうのむれ本いふかゝりてそいふらせ

從一位

資校

常善寺

由緒有寺之恒記略之

草津川

村よりこの小川なり

○下新屋敷

園村

統一本高

○目川

坊代

○川

川つれ池

右の方

附言

此池より石をすてのる九百ヶ村にひびてまた紙を制を乞近江國の名産ひいて月々の花

をなで紙は深浸し其花の名俗に花紙といふなり

灰塚山

川面村の左の方

上古の大栗の樹の枝葉を焼く灰のふれぬくといふ

銘

是初を尚陣營の地之陣中にて

石原

又儀を受村

稲荷の小祠あり

此村より昔をたふさうのありとて受村ともつたもみ

既山の中一々話といふ書にも郡縣の賈人夫妻の賈人

○小野

やハセ」の
矢橋

秋の月夜の舟より
 物言ふむらゝ湖水
 舟なりしうみ海より
 一が此舟の出来より由
 来の志望の道より月
 と月夜女ありるが夏の
 うらわらるる松よりうら
 睡ひける男ありる夜
 を流しててきりく今より
 仍とてうきまん我の田
 山年経る楠の大木
 ちるが其本を切て
 舟を造り湖あり
 ののしんせんとおの
 守より既日はあを切
 べしと空よりぬれども
 其舟を万人よりてもい
 づては其の舟あり



胎内は狭くして男を
 を石の守とてし給ひ
 舟にまぐと
 其の船をくふくふと
 舟のふくふくして船を
 はし給ふに忽ち舟に
 るくと懸垂の石ひを切
 舟のふくふくして舟の
 の如く舟の船をくふく
 舟のふくふくして舟の
 舟のふくふくして舟の

け船渡り三つ子の船を
 舟のふくふくして舟の
 舟のふくふくして舟の
 舟のふくふくして舟の
 舟のふくふくして舟の
 舟のふくふくして舟の
 舟のふくふくして舟の
 舟のふくふくして舟の



師事家父其子と傍
よをいて着業所

押へ具服居を
用き近如集

と寄て男婦二
人五人と其毒

の毒核を依て
本日論の使役と

以てはかせし人
い腐れお後さて後

又死を其子の耐さる
をまひた板のりた

本其しとて醫術を
終ひる其耐良良宗

の刀の持供人として
能かかあひて後

きて後くやうろく
先全く乳母が忠告を

威威甘き味の味に
勝つて出ま蹴

満つておる
ものあり



野路玉川
のちのれまがハ

何ともえん

神話の

玉川

萩とえ

海

さなれ

波う

月あがり

俊親



旧事記
二見也

○糸川四月中午日之古い大社之タラダ。大茅新田。月の輪池村の入口

老上川。鴉の宮濁の池の中にあり。玉水の池街道の。榎本原

野路玉川日幸六ツの玉川の其一ツ之此の池をあらふ御座るより一町斗たへおちまふ川の水

草津驛此驛中より中道本曾海原の波旁あり即標石を立し

草津より淡よびうの方ありやるやめいり於志がれし舟

為尹

乳母餅お建美藤にして且去院藤ふも乳堂の餅のり実の圖の傍に記と

○乳母の餅は標石の矢橋の船場まで其町と記せり即おの傍よりあり

山田矢橋の船場石場より船にて渡る五十町の海上と山田の渡

いさす存物を渡り終景のせん方は膳布を長く發するごとく南にせられたる橋

堀後百首
めはてりや矢橋の渡りより舟をいりていりせしれ橋也

兼昌

鞭寄八幡宮矢橋町の傍にあり。糸井三座中の神功皇后左に住吉右に高良也

天武天皇白鳳四年大中臣清麻呂勸請之傳曰建久元年十月二日頼朝

上洛之時此祠前より射馬上より鞭をひていりし神ぞと浦人み

平治物語頼朝遠流の条下曰盛安
 大津とてたじり人々を誘ひあつ
 せしに橋もあつて舟にてひるの地へ
 まゝり舟へいけをかりてお送り
 なりあは社のまへなる紙つある神
 々しく向ふいまげん明神も依敷
 さん今夜いけ清前を通りて
 ひ後ののりをもとまんときぞ
 まゝり多しころ夜あけ人あづ
 まりて盛安とたるいね中
 清ねあはるづらうころしや
 せいの不思議のあまをとり
 たりぬえ君はしやうあにて
 八幡清ありて大床の座を
 盛安清供ひて石のの上を
 同公あはれに十三斗の童
 ゐれり前とていして大床を



今世は人の世なり
やまをいひてまゐり

ていとすまれ
うの御座る殿の

内よりけだるに
御座るを海へ

おまめをけだるに
おまめをけだるに

先におまめを食せしむ
らるれば天ぞおまめを御

座るを世の御座る人に見
おまめを御座る人に見

それぞとけだるを食へて
おまめを食へて

おまめを食へて
おまめを食へて

おまめを食へて
おまめを食へて

おまめを食へて
おまめを食へて



栗太郡

勢田川より
東をいつく

昔此地

たみ栗の太木

あり
因

郡

如左

2

今昔物語云わづ一近江國粟志郡はたかり旅の本あり圍抱五百尋ありて本の云ふと
おのゝいひよりさうとさうとこゝろづー其薩朝はち丹波國に押さへてはつて海邊國を去る

輝靈^{きりやう}方^{かた}に^も不^ふ執^{しつ}を^もし^て其^{その}腰^{こし}の志^{こころ}契^{くわい}栗^りを^もし^て甲^かの三^{さん}君^{きみ}の百^{ひやく}姓^{せい}に^もた^ての落^{らく}多^{おほ}く^て拜^をり^て
 ち^ちう^うう^うて百^{ひやく}姓^{せい}當^{あた}此^{この}裔^{いへ}を^もし^て六^{むく}則^{すなは}掃^{そう}守^{しゅ}の宿^{しゆく}孫^{そん}を^もし^て公^{こう}は^はく^く一^{いつ}は^は本^{ほん}を^も代^{しろ}例^{れい}

たる其後孝饒と云う其所の百姓の子孫今に其郡とありと云
 たる此物と云うに物の本と云うされども大抵其地を以て郡名と号するゆその例

お漢も又おうちより粟の葉と折の葉をぬくものやまふなりなりといふへは粟と
も又折とつひにたゞ今にも其葉をぬくものなり黒人これをスクモといふ

栗本里

金焦集
五

人者以爲

後中書

うらうら

後に粟

日く此

五

17

龍神祠

○ 俵 友

古
祠
て 橋

小刀ことう 撥はく 扇あふぎ 子こ 筆ふで 硯すずり

ひあり秀
み中へ招

御子孫

て去ら

通志

下馬

ふ。あれは世の僕人されども小祠梅りあるも今も公より修補し終るを人いむに
まゝの怪をそおさるゝのあきともなれど終るくは是梅娘明神の祠なりとて

徳守儀の御之山城宇治橋佐勢宇治橋佐の橋もに橋姫の御あり祖々秀郷ハ江ノ
 前守氏の御もあまふ着より其氏の御を娶り来りもあまふもあまふも

勢田駅を非宮勅使進發小曾坂の園を出て近江往兼到勢田駅

司差供給次到野洲河後と云、
江邊

部明神ミナモトノカミ社ヤを以て國クニ
 所祭大己貴命オホニギハヤヒノミコト天武帝テンブ白鳳ハクホウに年トシの
 勸請コンケイ曲キョク豐トヨ

武部大社
 一宮大社
 天目一命

卷之二十一

勢田橋 せいのたのし

風雅集

貢 きん

延 のび

そ そ

車 くるま

路 みち

乃 の

勢田の

長橋

井 い

さ さ

盛 もり



秀句

五月雨

子

かれぬ

ものや

瀬田乃

し

るそ



大園寺

城山

正源寺

布引山

栗林。新。小里

今在家

稲川。遠原碑

瀧樹明神社。今。宿

大野。徳原

市場。糸野

松尾。松尾川

土山。一里山

田村明神

田村川

田尻野。猪俣明神

解板。蟹塔

猪鼻

山中。聚樂寺

頂。澤

勢州。境

鈴鹿山。三井山。坂幸。田村社

伊勢海硯

鈴鹿社。日武宮

鈴鹿川

橋弁天

小女溪

岩窟觀音

坂下驛

金藏院

法安寺

一里山

燒地藏

番掛

一瀬。日川

筆捨山

朝日弁天

權現山

四新茶屋

大黒石。惠比須石

羽黒山。奇石

茶鍋淵

一瀬。日川

長持石。ころび石

関驛

河新嫁塚

清見原。五重塔

鈴鹿園路

関地藏。日開眼法

あそ楊あそやう

和琴橋わごんはし

追分おひわけ

天神社てんじんのかみ 日森ひもり

片淵城趾かふちのしろあと

土岐百塚とぎのひゃくづか

空也堂くうやだう

一身田高田専修寺いつしんでんたかたせんしゆじ

大乃已所神社おののここのどんりや 大部田おのべと

久我白石明神くがしらいしやうじん

川上瑞光寺かみかみみづみつじ 柿かき

関川せきがわ

観音堂くわんおんどう

高野尾たかのび

窪田くぼた

坂部さかべ

城趾しろあと

湯津盤ゆづばん 日森ひもり

古驛ふるえき

中繩なかつづな

豊久野とよくの 杉掛松すぎかかけまつ

光明山安養寺くわうみやうざんあんやうじ

例禪淵齋塚れいぜんえんしやうづか

三好茶屋さんこうちや

小丹浦こまのうら

三日城みっぴろ

津岸山福藏寺つぎしやまふくざうじ

楠原くすはら

掠本りやくほん

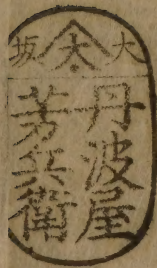
野寄のき

六太院ろくだいゐん

一の宮いちのみや

中野なかつの

一〇五



伊勢參宮名所圖會卷之二

目錄

勢田橋せたのしり古戰場こせんば頓宮とんぐ旧跡きゅうせき

建部明神たけべあきみ龍神祠りゅうじん依成よなり新田あらた月淪池つきろうち

野路玉川のろたまがひ草津驛くさつ石いしの化け

鞍寄八幡くらせはちまん立本明神たつほんめいじん

岡村おかむら目川めがは

灰塚山はいづかやま狗いぬ手原てがは小池このち

善光寺ぜんくわうじ上野うの林はやし

石部驛いしべ吉原きちげん吉原きちげんの社のしゃ

針村はりむら日川ひがは里夏見さとなつみ三雲さんぐも

馬場ばば光八幡ひくはちまん水口驛みづぐち

栗太郡くりたぐん日里ひり栗太くりた

老上川らうじがは五水の池いみづの池

乳母うはは餅もち

常善寺じょうぜんじ

坊袋ぼうふくろ

三上山さんやま極山ごくさん

伊勢落いせおち金かね

阿星山あせうさん東寺とうじ西寺さいじ

横田川よこたがは枕堂まくらどう鳥とり

大宮社おほみや

勢田驛せた

桧原ひづら

山田矢橋やまだやせ

草津川くさつがは下影しもかげ石いし

川面かわづら日池ひの池

梅の木うめ是齋ぜさい

甲賀郡かうかぐん日三郎ひさぶろう

掛子袋かこふくろ平松ひらまつ

泉いづみ北服きたふく林口はやしぐち

大德寺おほとくじ

丹芳次

伊勢參宮名所圖會

二